

## 菊花（野菊花） CHRYSANTHEMI FROS

（日本薬局方外生薬規格）<sup>23)</sup>

キク *Chrysanthemum morifolium* Ramatulle 又はシマカンギク *Chrysanthemum indicum* Linne ( *Compositae* ) の頭花である。

本来野菊花は菊花と効能は異なっているが、日本漢方では慣例として菊花と同様に用いている。現在日本の市場では菊花として野菊花が流通している。東医研では野菊花を使用している。

### ◎菊花<sup>19)</sup>

キク科 *Compositae* のキク *Chrysanthemum morifolium* HEMSL (= *C. sinense* SABINE) および、その品種の頭状花を乾燥したもの。シマカンギクとチョウセンノギクを（ハイシマカンギクとチョウセンノギク、ともいわれる。シマカンギクはハイシマカンギクの母種）唐以後に交配したものに由来する。栽培品種のキクの花を菊花という。

※菊は古来から漢民族に愛好され、多くの栽培品種が知られている。（20種とも100種とも言われる。）

### ◎野菊花（のぎくか・やぎくか）<sup>9) 17) 19)</sup> 別名：苦薺、漢菊花、菊花

キク科 *Compositae* のキク属 *Chrysanthemum* 植物の頭花で、シマカンギク *Chrysanthemum indicum*（島寒菊）、アブラギク *C. boreale* MAK.、ホソバアブラギク *C. lavandulaefolium* (FISCH.) MAK. などの頭状花を用いる。中国では全草も野菊または苦薺と称して薬用にする。

○苦蕒：

野菊花は苦いため（菊花を甘いので「甘菊花」と呼ぶのに対して）「苦蕒」ともよばれる。「苦蕒」は『本草拾遺』の「野菊」の別名として収載されている。李時珍は「蕒とは蓮子の心のことでこのものが味苦くそれに似ているから同じ名前前で呼ぶのだ。処々の原野に極めて多い。菊とは異ならないが、ただ葉が薄くて尖が多く、華が小さくて心が多く蜂巢の様な形状のものだ。気味は苦くて辛く惨烈である。」と言っている。

陶景は、「菊に兩種あって、一種は茎が青くて大きく蒿艾（ヨモギ *Artemisia* 属植物）の気があって、味は苦く食うに絶えない。これは苦蕒と名付けるもので真の菊ではない。華は正しく相似ているが、ただ甘いか苦いかで識別できる。南陽（河南省南陽県）、麗県（河南省郷県付近）に最も多く、今は近道の処々にあって種を取って植える」と言っている。（このような甘い菊はハイシマカンギクに充たるものと考えられる。このものは河南省に多く分布し陝西省南部には分布しない。中国中部のある地方では今でもこれを甘菊と称している。）

野菊即ち苦蕒は野生の苦味を有するキク類で多く種類があったものと考えられる。現在の市販品の「野菊花」または「苦蕒」と称されるものは、径 5mm ほどのキク属の頭上花であってその基原はホソバアブラギクに近いものと思われるがまだ確証はない。他説には、苦蕒はわが国に輸入される場合「漢菊花」とも称され、キク科のホソバアブラギクまたはその近縁種の頭上花を乾燥したもの、とも言われる。

○アブラギク（油菊）：

このキクの花や葉からゴマ油で抽出した精油成分を「菊油」として利用していたことに由来する。「菊油」には殺菌力があり、切り傷ややけどの外用薬として用いていたほか、島津藩では蒸留したものを「秘薬薩摩の菊油」と称して下痢や腹痛の薬に使っていた。

(性状)<sup>23)</sup>

【日本薬局方外生薬規格】

本品は径 0.3～3cm の頭花で、総包は3～4列の総包片からなり、総包外片は線形～ひ針形、内片は狭卵形～卵形を呈する。舌状花は多数で、白色～淡黄褐色、管状花は少数で淡黄褐色を呈し、ときに退化して欠くことがある。総包の外表面は緑褐色～褐色を呈する。質は軽く、砕きやすい。

本品は特異なおいがあり、味はわずかに苦い。

【野菊の形態】<sup>2)</sup>

草丈 30～60cm。根茎は横走し匍枝を付ける。茎は細く、基部はやや倒状し通常帯紫黒色で頂部まで葉を付ける。葉は互生し、卵円形か長円上卵形で長さ 4～6cm。羽状に5中～深裂し、裂片は尖頭きょ齒縁。花期は 10～12 月。茎の頂に淡黄色の舌状花と深黄色の筒状花からなる頭花を付ける。

(産地)<sup>1) 2) 22)</sup>

野菊は本州近畿地方以西、四国、九州および朝鮮半島南部、濟州島、中国、台湾に分布し、山地、丘陵地の道ばた、荒地、林縁などにふつうに生える。

苦蕒の産地としては、江蘇省南京、鎮江、蘇州、南通、泰州、揚州、四川省重慶郊区、広西省桂林、全県、柳州、永福などがある。

○東医研では安徽省産のものを使用している。

(品質)

【確認試験】<sup>23)</sup>

本品の粉末 0.2g に無水酢酸 2ml を加え、水浴上で時々振り混ぜながら 3 分間加温した後、ろ過する。ろ液に硫酸 0.5ml を穏やかに加えるとき、境界面は褐色～赤褐色を呈する。

【灰分】<sup>23)</sup> 11.0%以下。

【酸不溶性灰分】<sup>23)</sup> 1.5%以下。

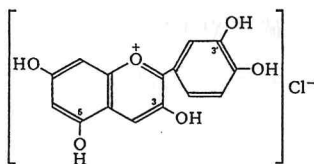
【選品】<sup>12)</sup> 新しく芳香があり、あまり苦くないものがよいとされている。

(主要成分) <sup>12) 19) 22)</sup>

精油中に dl-camphor, 3(10)-carene, chrysanthenone, camphene が含まれる。 <sup>12)</sup>

その他 chrysanthemine など

シアニジン [cyanidin] 塩化物は  $C_{15}H_{11}O_6Cl$  (図).  
アントシアニン\*に属する色素. 配糖体シアニンや



クリサンテミン(シマカンギクの花にある配糖体. 塩化物は  $C_{21}H_{21}O_{11}Cl$ , シアニジンの 3-グルコシド)などのアグリコンとして存在する. シアニジンの 3'-モノメチルエーテルをペオニジン(p(a)eonidin)という.

(現代薬理)

【抗菌作用】 <sup>22)</sup>

黄色ブドウ球菌・ジフテリア菌などに対し抑制作用がある。また、赤痢桿菌などに対しても抑制作用が認められた。

【降圧作用】 <sup>2) 9) 22)</sup>

・野菊花(苦薺)のエタノールエキスを、麻醉ネコに 16g/kg 腹腔内注射すると降圧効果が見られ、脊髄切断ネコにおいても同様である。

この作用は比較的緩慢だが持続性が認められた。

・動物実験によると明かな降血圧作用がある。アドレナリンに拮抗して末梢血管を拡張し、血管運動中枢を抑制することによる。

(古典的薬効)

薬味：苦・辛 <sup>9) 17)</sup>

薬性：涼 <sup>9) 17)</sup> 微寒 <sup>17)</sup>

帰経：肺・肝経 <sup>9) 17)</sup>

効能：清熱解毒 <sup>9) 19)</sup>、降圧 <sup>9) 19)</sup>、消腫 <sup>17)</sup>

各種の菊花は程度は異なるが疎散風熱・解熱・解毒(消炎)・明目などの効能がある。野菊花は清熱解毒の力が強く、化膿症に効果がある。

〈神農本草經〉<sup>12)</sup>

『主として諸風、頭眩、腫れて痛む病や目が脱け落ちるのではないかと欲うほどの重だるい病や、涙が出て止まらない病や、皮膚の病や、死肌とよばれて肉が消滅してくる病や、悪風と言って風に当たるとぞーぞーして気持ちが悪くなる病や、湿気を主力とする風・寒・湿の気にあてられて血や気の流れが滞り、そのために痛んだり痺れたりする湿痺の病を治すことができる。

これを久しく服用していると血や気めぐりを利くして身の動きが軽くなり、老齢にも耐えられ、年齢をのばせるようになってくる。』

※当時使用したと思われるのは中国北部に野生するホソバアブラギク、チョウセンノギク、中国南部のハイジマカンギクである。

(臨床応用)

○野菊花の流浸膏を子宮頸びらん患者の患部に塗布すると治癒率約 85% であった。<sup>22)</sup>

○疔、せつなどの化膿症に、単味で或いは金銀花・蒲公英などを配合して用いる。<sup>9)</sup>

○高血圧症に用いる。野菊花を熱湯に浸して茶の代わりに飲むか、決明子・夏枯草を配合して水煎服する。<sup>9) 19)</sup>

○解熱、解毒、鎮痛、消炎薬として感冒、肺炎、胃腸炎、高血圧症、湿疹、できものなどに用いられる。<sup>22)</sup>

(使用上の注意)<sup>17)</sup>

苦味で敗胃しやすいので長期間の服用は避ける。

陶  
弘  
景

(参考文献)

- 2) 原色和漢薬図鑑(下) p123~126
- 9) 漢薬の臨床応用 p40~41
- 12) 意积神農本草経 p26~27
- 17) 中医臨床のための中薬学 p112~113
- 19) 漢方のくすりの事典-生薬・ハーブ・民間薬- p322
- 20) 和漢薬の良否鑑別法及調整方 復刻版 p221
- 22) 原色牧野和漢薬草大圖鑑 p549
- 23) 日本薬局方外 生薬規格 1989 増補版 p17
- 24) 中国日本薬用植物・生薬 p15~16
- 25) 和漢薬への招待 p68~70

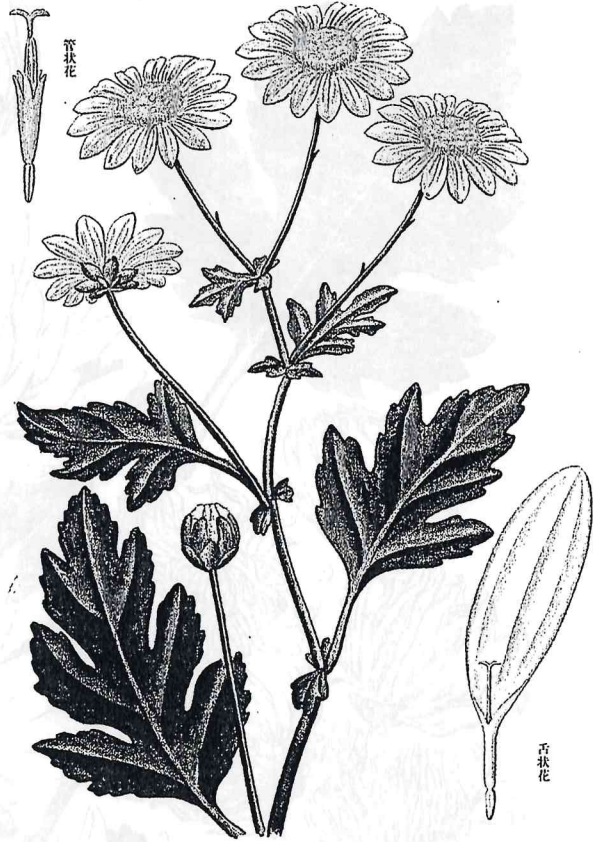


薬用部分：頭花，全草

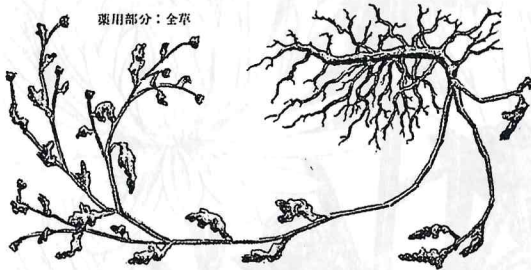
1040. アブラギク(シマカンギク，ハマカンギク)  
*Chrysanthemum indicum* L. [キク属](きく科)

(油菊)(中)野菊，野菊花

【分布】本州近畿地方以西，四国，九州および朝鮮半島南部，  
濟州島，中国，台湾に分布し，山地，丘陵地の道ばた，荒  
地，林縁などに普通に生える多年草。【形態】草丈30~60cm。  
根茎は横走し，匍枝をつける。茎は細く，基部はやや倒伏  
し，通常帯紫黒色で頂部まで葉をつける。葉は互生し，卵  
円形か長円状卵形で長さ4~6cm。羽状に5中~深裂し，  
裂片は尖頭きよ齒縁。花期は10~12月。茎の頂に淡黄色の  
舌状花と深黄色の筒状花からなる頭花をつける。【薬用部分】  
全草(野菊<ヤギク>，ノギク)，頭花(野菊花<ヤギクカ>)。  
夏~秋に全草を採集し，日干しにする。頭花は秋の盛夏期  
に採集し，日干しか火で乾燥する。【成分】全草にフラボノ  
イドのアカシニン，ルテオリン，クリサンテミンのほか，  
クリサンテマキサンチン，精油のカンフェン，カンフォー  
ル，カルボン，頭花にクリサンテミン， $\alpha$ -ツオン，dl-カン  
フォール，テトラコサン，ヘキサコサンなどを含む。【薬効  
と薬理】野菊花のアルコールエキスおよび水溶液は麻酔ネコ  
に対し血圧降下作用を示し，この作用は比較的緩慢だが持  
続性がみられた。また野菊花の煎剤は黄色ブドウ球菌，赤  
痢桿菌などに対して抑制作用が認められた。野菊，野菊花  
とも解熱，解毒，鎮痛，消炎薬として感冒，肺炎，胃腸炎，  
高血圧症，湿疹，でき物などに用いられる。【使用法】野菊，  
野菊花とも1日量6~12g，生のものならば30~60gを煎じ  
て服用する。



(牧新2589)

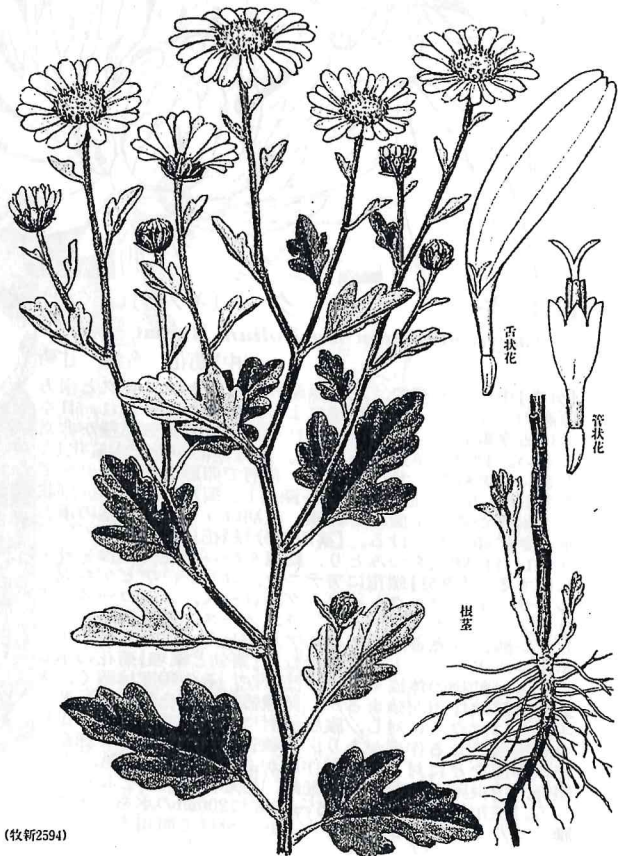


薬用部分：全草

1041. リュウノウギク [キク属](きく科)  
*Chrysanthemum makinoi* Matsum. et Nakai

(竜腦菊)

【分布】本州福島県，新潟県以西，四国，九州宮崎県に分布  
し，山地，丘陵地の向陽地に生える多年草。【形態】草丈  
30~80cm。地下茎は細長く，のち木質化する。茎は斜上か  
直立し，上方で少数分枝し，枝は灰白色の密毛がある。葉  
は互生し，卵形か広卵形で3中裂か浅裂し，裂片はさらに  
1~2浅裂するか粗齒牙縁。花期は10~11月。茎の頂に白  
色，ときに淡紅色の頭花をつける。【薬用部分】全草(竜腦菊)。  
秋の開花中に全草を刈りとり，土を除いて通風のよい場所  
で陰干しにする。水洗いすると乾燥に時間がかかり，かび  
やすくなるので洗わない。【成分】全草に精油(0.8%)を含み，  
その主なものはl-カンフェン，dl-カンフェンである。【薬  
効と薬理】dl-カンフルは皮膚に対し，少量で冷感，量を増  
すと弱い局所刺激，麻酔，防腐作用があり，大量では炎症  
を起こす。dl-カンフルを投与すると呼吸の強盛，血圧の上  
昇，発汗，解熱などの作用が起こり，少量で胃部の不快感  
を除くが，大量では嘔吐を引き起こす。dl-カンフルは打撲  
傷，凍傷，肩こりなどの軟膏に繁用される。竜腦菊は薬用  
浴湯料として冷え症，腰痛，リュウマチ，神経痛などに用い  
られる。【使用法】竜腦菊は浴湯料として，1回量500gを目  
安に，木綿の袋に刻んでつめ，水のうちから浴槽に入れて  
湯を沸かす。入浴中にこの袋で肌を洗うようによくこす  
るとよい。



(牧新2594)



1044. キク [キク属] (きく科)  
*Chrysanthemum morifolium* Ramat.

(中) 菊花, 金精, 甘菊

【分布】中国の原産で、北方原産のチョウセンノキクと南方原産のシマカンギクの交雑によってできたといわれ、日本では古来観賞用に広く栽培される多年草。園芸品種が非常に多い。【形態】草丈50~140cm。茎は基部がやや木質化し、ときに帯紫紅色。葉は互生し、有柄で卵形か卵状披針形で長さ3.5~5cm。通常羽状中~深裂し、裂片は不整の欠刻状きよ齒縁か重きよ齒縁で鈍頭。花期は9~11月。茎の頂と葉えきに頭花をつける。【薬用部分】頭花(菊花「キクカク」)。9~11月に頭花をつみとり、総苞を除いた花弁だけを日干しにする。【成分】頭花にカプテンジ、コリン、アピゲニン、アルゴサイド、フルクトース、グルコース、スクロース、アラビノース、ガラクトース、ラムノース。葉に酢酸、プロピオン酸、安息香酸、アミノアルデヒド、ホルネオール、ボルニルアセテートなどを含む。【薬効と薬理】菊花の水煎液は動物の体温を低下させるが、その程度は弱く、大量では解熱作用が強まるが、循環器系障害を起す。菊花エキスはマウスに対し、腹腔注射によって毛細血管の抵抗力を増強させる作用があり、試験管内で黄色ブドウ球菌、結核桿菌などに対して抑制作用がある。菊花は解熱、解毒、鎮痛、消炎薬として感冒、発熱、悪寒、頭痛などに用いられる。【使用法】菊花1日量5~10gに200mlの水を加えて沸騰させたものをさし、2~3回に分けて服用する。



(牧野2584)

薬用部分: 根, 根茎, 全草

## 菊花・野菊花 (苦蕒)

『神農本草經』の上品に収載され、「久しく服すれば血氣を利し、身体を軽くし、老衰に耐え、天年を延べる」と記述されている。

キクは観賞用にも唐時代から作られ、宋時代に出版された劉蒙著『菊譜』には花色に白、黄、紅、紫色などがあり、花径が10センチほどのものが出現し、品種は36種もあり夏菊も出ていたようだ。

キクは中国語では菊と書くが、李時珍は「按ずるに陸佃の埤雅に菊はもと藪と書き、鞠に従ふ。鞠は翦きわめるの意味だ。月令に、九月菊に黄華ありとあって、是が華の窮極だから鞠と謂ふ」と述べている。

旧暦の九月九日の重陽の節句には邪気を払い、寿命を延ばすようにと菊酒を飲み、菊花を枕につめて頭痛を治し、菊花の上に綿を置いて露をしませ、香を移して身体を拭ったといわれる。

### <基 源>

『日本薬局方外 生薬規格』

### 《菊花》

- ・本品はキク *Chrysanthemum morifolium* R. 又はシマカンギク *Chrysanthemum indicum* L.(キク科 *Compositae*)の頭花である。

『中華人民共和国薬典 (2000年版)』

(菊花・野菊花が別條で記載されている)

### 《菊花》

- ・本品は、菊科の植物 菊 *Chrysanthemum morifolium* R.の乾燥した頭花である。9~11月の花の満開時に採集し、陰干し或いは焙って乾燥、或いは燻蒸、或いは蒸してから天日干しする。薬材は産地と加工方法は不同だが、“亳菊”、“滁菊”、“貢菊”、“杭菊”に分けられる。

### 《野菊花》

- ・本品は、菊科の植物 野菊 *Chrysanthemum indicum* L.の乾燥した頭花である。秋から冬あたりに花が咲きはじめる時に採集し天日干し、或いは蒸してから天日乾燥する。

\* キク(図1)は双子葉、キク科、キク属 (*Chrysanthemum*) の植物で北半球の温帯域を中心に約200種が分布しており、8乃至10の節に分けられる。日本のキク類はほとんどがキク節 (*Dendranthema*) に属し、約50の種が生育している。キクの原産地は中国とされているが、原種は発見されておらず、シマカンギク(図2)またはノジギク(図3)から淘汰、改良されたという単種発生説、数種の交配によりできたとする交雑説など諸説がある。



155. キク (*Chrysanthemum*)



163. アブラギク (*Chrysanthemum*)



161. ノジギク (*Chrysanthemum*)

<成分・薬理>

《菊花》

菊花の成分にはクレサンテミン、アミノ酸、ビタミン B1 などが含まれているが、薬理作用は明らかではない。

菊花の水浸液は動物の体温を低く低下さす。その大量では解熱作用が強いが、循環器系障害をおこす。またマウスの毛細血管抵抗性増強作用がある。杭菊花は試験管内で、大腸菌、チフス菌、パラチフス菌、緑膿菌などの 7 種のグラム陰性腸内病原菌に対して完全な抑制作用がある。また白菊花の水浸剤 (1:4) は試験管内において各種皮膚真菌に対し抑制作用がある。

《野菊花》

シマカンギクの花にはクリサンテミン、 $\alpha$ -ツヨン、dl-カンフルなどが含まれ、降圧作用、抗菌作用が認められている。

野菊花 (苦蕒) のエタノールエキスを、麻醉ネコに 16g/kg 腹腔内注射すると降圧効果がみられ、脊髄切断ネコにおいても同様である。臨床的には野菊花の流浸膏を子宮頸びらん患者の患部に塗布すると治癒率約 85%であった。

<性 味>

《菊花》

中薬大辞典：甘苦、涼。

神農本草経：味は苦、平。

名医別録：甘、無毒。

天寶単方図：白菊の味は辛、平、無毒。

随息居飲食譜：甘、涼。

《野菊花》

中薬大辞典：苦辛、涼。

本草彙言：味は苦辛、気は涼、小毒。

四川中薬志：性は微寒、味は甘苦、無毒。

<帰 経>

《菊花》

中薬大辞典：肺、肝の経に入る。

雷公炮製薬性解：肺、脾、肝、腎の 4 経に入る。

《野菊花》

本草求真：肺、肝に入る

<薬効と主治>

《菊花》

中薬大辞典：風を疏らせる、清熱する、目を明らかにする、解毒する、の効能がある。頭痛、めまい、目赤(目の充血)、心胸煩熱、疔瘡、腫毒を治す。

神農本草経：諸風頭眩(風によるめまい)、腫痛、目欲脱、涙出、皮膚死肌、悪風湿痺を治し、血氣を利す。

名医別録：腰痛が去来して長引くものを療す、胸中の煩熱を除く、腸胃を安らかにする、五脈を利す、四肢を調える。

陶 弘 景：白菊は風眩(風によるめまい)を治す。

薬 性 論：熱頭痛旋倒地(熱頭風によるめまい)、脳骨疼痛を治し、全身の諸風を治し、全身の諸風を消し散らす。

\* 漢方では解表・平肝・明目・清熱解毒の効能があり、頭痛、めまい、目の充血、視力の低下、化膿性の炎症などに用いる。一般に亳菊花は視力の改善(明目)の作用が強く、杭菊花は頭痛や目の充血など炎症(風熱)に対する作用が強いといわれている。

#### 《野菊花》

中薬大辞典：風を疏らせ清熱する、腫れを消し解毒する、の効能がある。風熱感冒、肺炎、ジフテリア、胃腸炎、高血圧、疔、癰、口瘡(口内炎)、丹毒、湿疹、天泡瘡(トビヒ)を治す。

本草彙言：血を破り肝を疏らせる、疔を解き毒を散らす。主に婦人の腹内の宿血を治し、流行性火毒丹疔を解く。瘡疥を洗えば風を去り殺虫することもできる。

現代実用中薬：癰疽疔腫の化膿した病に用いる。

蘇州本産薬材：解毒し風を疏らせる。目疾眩暈を治す。

浙江中薬手冊：膿を排しのけ解毒する、腫れを消し止痛する。癰腫疔毒、天泡湿瘡を治す。

江蘇植薬志：霍乱(コレラ)、腹痛を治す。

山西中薬志：風熱を疏らせる、頭目を清める、火を降ろし解毒する。諸風による眩暈、頭痛、目赤、腫毒を治す。

江西草薬：ジフテリア、口瘡、小児の高熱による抽搐(ひきつけ)などの症状を治す。

上海常用中草薬：高血圧を治す。

\* 中医学では清熱解毒・降圧の効能があり、感冒、肺炎、胃腸炎、皮膚化膿症、高血圧などに用いる。近年、高血圧の予防に野菊花が茶剤として服用されている。本来、菊花と効能は異なっているが、日本漢方では慣例として菊花と同様に用いている。

#### ＜備考＞

- ・『増訂和漢薬考』によれば、昔、脾腎を養う薬として菊花に熟地黄、人参と氷砂糖を加えた薬用酒を使ったようであるし、また、苦いアブラギクの花弁を水蒸気蒸留して得た油を薩摩より「菊油」として売り出し、頭痛、眩暈、歯痛、腹痛、下痢、眼疾や金瘡、火傷、螫傷(毒虫さされ)、麻疹などに塗布または服用して効果をあげたらしく評判が良かったようである。

#### ＜処方例＞

- ・加減桑菊飲《新方》：白僵蚕・蝉退・桑葉・菊花・釣藤鈎・黄芩・朱砂
- ・杞菊地黄丸《医級》：熟地黄・山茱萸・山藥・茯苓・沢瀉・牡丹皮・甘菊花・枸杞子
- ・桑菊飲《温病条弁》：桑葉・菊花・杏仁・連翹・桔梗・薄荷・芦根・甘草
- ・釣藤散《本事方》：釣藤鈎・甘菊花・防風・石膏・党参(人参)・麦門冬・茯苓・半夏・陳皮・炙甘草・生姜
- ・明眼一方《土生氏家伝方》：防風・車前子・滑石・桔梗・菊花

#### ＜参考文献＞

- ・『日本薬局方外生薬規格』
- ・『中華人民共和国薬典』、化学工業出版(2000)
- ・『和漢薬百科図鑑』、難波恒雄著、保育社(1993)
- ・『中薬大辞典』、上海科学技術社、小学館(1985)
- ・『漢方のくすりの事典』、鈴木洋著、医歯薬出版(1994)

\*参考\*

菊花			
<p>乾燥した頭花は、外層には数層の舌状花があり、扁平な花弁状で、中心部には多数の管状花が集合し、基部には3~4層の包片からなる総包がある。においはすがすがしく、味はうすくてわずかに苦い。 *花弁が整い、色が鮮やかで、においがよく、夾雑物のないものを良品とする。</p>			
白菊花	亳菊	安徽省	<p>不規則な球状か圧扁状で、直径約2cm、弁が多く緊密。花序の大部分は白色の舌状花で、長さ約18mm、幅約3mm。中心部にはごく少数の短小な淡黄色の管状花がある。‘亳菊’は、品質がよい。‘懷菊’‘祁菊’‘川菊’は、品質がやや落ちる。</p>
	懷菊	河南省	
	祁菊	河北省	<p>*亳菊の調製法：花枝の部分から切り取り、束にして逆さにつるし、陰干ししたあと花序を摘み取る。</p>
	川菊	四川省	
滁菊花		安徽省	<p>球状で、形は比較的小さく、弁は緊密。舌状花は白色で、長さ約15mm、幅約3mm。中央には黄色の管状花がある。品質は良い。 *滁菊の調製法：花序を摘み取り、イオウで燻し、日干しする。6分程度乾燥したら、ふるいでふるって球状にし、さらに日干しする。</p>
貢菊花		安徽省	<p>形は滁菊に似ている。弁は細くて厚い。舌状花は白色、長さ10~12mm、幅約2mm、中央には黄色の管状花がある。‘徽菊’ともいう。昔、浙江徳清にも産し‘徳菊’といった。 *貢菊の調製法：花序を摘み取り、火であぶって乾燥させる。</p>
杭菊花	杭白菊 (白茶菊)	浙江省 嘉興, 呉興, 桐興	<p>不規則な圧扁状で、花は大きく、弁は広く数が少ない。舌状花は比較的少なく、類白色、長さ約22mm、幅約6mm、中央に少数の深黄色の管状花がある。 *杭白菊の調製法：花序を摘み取り、蒸したのち、日干しする。</p>
	杭黄菊 (黄甘菊)	浙江省 海寧	<p>形は杭白菊に似ているが、舌状花は黄色か淡褐色。 *杭黄菊の調製法：炭火であぶって乾燥させる。</p>
野菊花 (苦蕒)			
<p>乾燥した頭花は扁平な球形で、直径0.5~1cm、外層は15~20個の舌状花で、雌性、淡黄色、しわがあり湾曲している。中央は管状花で、両性、長さ3~4mm、黄色、先端は5裂し、子房は黄褐色で、冠毛はない。底部には総包があり、20~25枚の包片からなり、覆瓦状に並んで4層になり、包片は卵形または披針形、枯黄色、縁は膜質。各花はいずれも半球状の花床に着生する。味は苦く、清涼感がある。</p>			
<p>主産地は、江蘇、四川、広西、山東など。</p>			

(中薬大辞典より)